

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 杉元 羊一

本年度の「こころの言の葉」作品集が出来上がりました。皆様にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今回で十四回目を迎えました。

本事業には、面と向かつては恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は過去最高の一万六千九百四十三点。また、親の部の応募も五年連続千点を超え、「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることを伺うことができました。さらに、八月にはFM鹿児島放送番組「MUSIC LUNCH BOX」で二十七年の入賞作品が朗読され、より多くの市民の皆様に関われる機会が生まれたことを大変うれしく感じています。

この作品集には、中学生の子供と親が、お互いに向けて宛てた四十五編のメッセージが掲載されています。心からの感謝を素直に伝える言葉。不安で揺れる思いをぶつける言葉。遠慮がちに、自分のささやかな願いをつぶやく言葉。反抗期の自分を持てあましながら不満と感謝の気持ちをつづける言葉。我が子の反抗期に戸惑いながらも大きな心で受け止める言葉……。一つ一つの言の葉が、読む者の心を揺さぶります。御家族皆様でこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださった全ての皆様に関心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十九年一月

目次

「想いを伝える」言の葉

—子から親へ—

小さい頃の手紙	4
背中からの会話	5
伝えきれないありがとう	6
かわいそうなんて	7
ありがとうの言葉を	8
話す時間をください	9
お父さんへの気持ち	10
父へ	11
愛の証	12
続けていきたい	13
届いてほしい	14

「想いをつなげる」言の葉

—親から子へ—

笑顔	16
君と私	17
手を振るあなた	18
大当たり	19
「反抗き念日」	20
磨かれた靴	21
お味噌汁の話	22
一本取られました	23
親から「君」へのメッセージ	24
お弁当づくりの宿題	25
ビデオを観ながら	26

「想いを交える」言の葉

—子から親へ—

待っているよ	28
弁当箱入れの中に	28
交換ノート〜家族っていいな〜	29
朝食	29
お母さんの手	30
分厚い壁	30
一緒に歩いてくれてありがとう	31
お母さん	31
私の母	32
必殺技	32
どんなときもどんなときでも	33

「想いを重ねる」言の葉

—親から子へ—

登ってこい	35
娘の思春期	35
ありがとう	36
春のようなあなたへ	36
反抗期万歳	37
ふと気が付くと	37
チャイルドシート	38
息子へ	38
家路	39
あなたへ	39
夢	40
泣かすなよお	40

平成二十八年年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	41
平成二十八年年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	42
審査員講評	43
編集後記	44

「想いを伝える」言の葉

—子から親へ—



小さい頃の手紙

この前、探し物をしていたら、三つ折りにされた小さな手紙があった。

開いてみると「今日は、○○ちゃんと○○公園で遊んでくるね。」と書かれてあった。

これは昔、母に書いた手紙だ。こんな昔の手紙を持っていたなんてびっくりした。他にもある気がして、少し探してみると、私が小さいころにサンタさんへ書いた手紙や、母へあげた誕生日カードや、最近書いた手紙や、いろいろな手紙が出てきた。

こんなに取りっけてもらえらるなら、もっときれいに字を書けばよかったと少し後悔した。私が無気なく書いている手紙も、母にとっては、小さな、小さな宝物なんだなと思った。これからは、もっとために手紙を書こうと思った。

背中からの会話

塾からの帰り道、バイクで信号待ちをしていると、「寒くないか。」と父は聞いた。

十二月の風は冷たかった。

「しっかり食べたか。」「学校楽しいか。」と、続けて父は聞いた。

信号が青になって走り出す。

わたしは、父の腰に回した腕に力を入れた。

今も忘れない。父とバイクで走った冬の思い出。



伝えきれないありがとう

最近、ちゃんとありがとうを伝えられるようになった気がする。前は、恥ずかしくて黙っていたけれど。私には母が二人いる。一人目は私を産んでくれた母。二人目は私を育ててくれる祖母のことだ。私が三歳の時にお母さんが亡くなってから、ずっと世話をしてくれる祖母。とても厳しくて、少しの事でも口うるさくて、でも優しい。口げんかばかりして、「親じゃない!」とか本当にひどいことを言ってしまったことがある。友達を見ていて、「何で私にはお母さんがいないんだらう。」と思うときもある。本当にうらやましい。でも、母はいないけれど、母のような祖母がいる。とてもこわいけれど、いつも温かく見守ってくれる。私の尊敬する人はたくさんいるけれど、一番尊敬しているのは祖母だ。これからきつと伝えるよ。伝えきれないありがとうを。

かわいいそうなんて

私には、お父さんがいた。優しくて、頼もしくて、かっこいいお父さん。そんなお父さんは病気にかかって、私が十歳のとき、天へと旅立った。その日から、いろんな人が私に声をかけてくれた。「かわいいそう。」と。

確かに世間から見たら、父親のいないかわいいそうな子供かも知れない。しかし、私はこれっぽっちも自分がかawaiiそうなんて思ったことはない。それは、お父さんが亡くなったことから新たに学んだことがあるからだ。一つは、命の大切さ。もう一つは、治療を頑張るお父さんの姿から、努力することの大切さ。

だから、私はかわいいそうな子供ではない。たくさん大切なことを教えてくれるお父さんをもった、幸せな子供だ。

ありがとうの言葉を

僕は父しかない。母のぬくもりなどまったく知らない。僕が小さい時には、母がいたが、その記憶は、ない。父しかない家庭で、母がいてほしいと何回も思ったことがある。父は、そんな僕を今まで育ててくれた。僕はそれがあたり前だと思っていた。でもどんどん僕が大人に近付いていくうちにわかってきたことがある。

それは、父が自分のことより僕を優先してくれていたこと。僕が熱を出して、迎えに来るとき、仕事で遠くにいるときでも、すぐに駆けつけてくれる。すごく嬉しいし、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

母はいないけれど、その分頑張って今の僕を育ててくれた父に、ありがとうと言いたい。でも言えない。恥ずかしい気持ちでいっぱいになる。この気持ちを早くなくしたい。そして、ありがとうの言葉を言いたい。

話す時間をください

家に帰ると、勉強のことばかり言うけれど、他に言うことはないの？

私は、お母さんともっと話がしたい。でも、勉強、勉強とばかり言うから、正直ものすごく腹が立つよ。

そんなに勉強が大事？

勉強だけじゃなくて、人を想う心も大切だよ。ときには冷たく当たってしまうけれど、本当はもっと話がしたいんだよ。

スマホばかり見ないで、ちゃんと子供のことを見てよ。忙しい、忙しいと言わないで、ちゃんと話をしようよ。私も話したいことがあるんだよ。私のことを想って言っていることは分かっているよ。時にはお母さんの言葉で自分の過ちに気付くこともあるよ。感謝することもある。勉強が大切だということも、忙しいことも分かる。けれども、もう少しは一緒にしゃべる時間をください。

お父さんへの気持ち

お父さんへの気持ちを言うね。まず、好きなところから。料理上手、ダジャレがおもしろい、優しい、疲れていても一緒に遊んでくれる、家族思いのところ。まだまだたくさんあるけれど、全部言っちゃったら止まらなくなるからやめとくね。

実はね、嫌いなどところもちよつとあるけれど、内緒にしておきます。

こんなに家族思いの優しいお父さんなのに、私は何もすることができなかった。

誰にも言っていないけれど、実は、お父さんが入院したとき、お見舞いに行かなかったのは、日に日にどんどん悪くなってやせ細っていくお父さんを見たくなかったからなんだ……。

お父さんが亡くなってから、すごく後悔した。

ごめんね。

これを天国で見えてくれていたらうれしいな。

父へ

僕の部屋とお父さんの部屋は、つながっています。つまり、お互いの部屋の音はただ漏れます。

このせいで困ることがいくつかあるので、聞いてください。

まず、僕が勉強している時に爆音で音楽を聴かなくてください。集中できません。それから、イビキをかいて寝ないでください。気になります。

文句のように聞こえるでしょうが、集中できないのは、父の聴いている音楽が好きだからだし、気になるのは、息が止まらないか気になるからです。



愛の証

「あなたはね、産まれてくるとき大変だったの。」母が言う。

「ママもあなたも危険な状態だったんだよ。」父が言う。

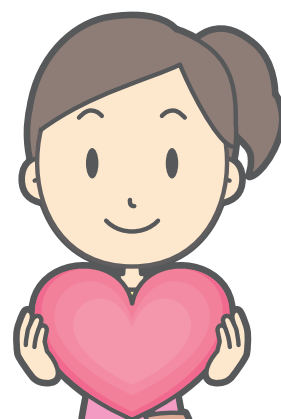
「あなたが産まれるとき、パパはママの傍らにいたから子守をしたのは僕達なんだよ。」
兄と姉が言う。

「あなたが無事に産まれてくるのを、皆で待っていたんだよ。」

「あなたの名前を考えたのは兄と姉、家族皆で考えたんだよ。」

「あなたが長い間入院して家に帰ってきたとき、家族で順番にキスをしたんだよ。」

産まれてきたときの話をするといつも聞いている言葉。たまには適当に受け流すけれど、とても嬉しいです。母のお腹に残る傷跡。自分の手の甲と首に残る傷跡。それは、私を産んでくれた母の愛の証。お母さん、産んでくれてありがとう。お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、私に素敵な名前をありがとう。

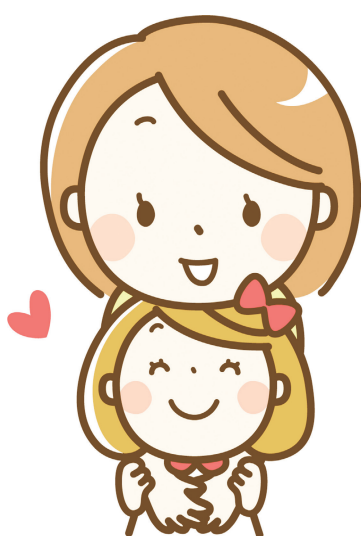


続けていききたい

学校に行くときの「行ってらっしゃい。」と、帰ってきたときの「おかえり。」で、母は私に抱きついてくる。私も嫌がりはするけれど、決して抵抗はしない。

朝、遠くにいる母に聞こえるように「行ってきます。」と言って、母が玄関に来るまで待っている私。夕方、玄関で母の靴を見つけたときに、とたんに笑顔になる私。どこかで母の行為を楽しみにしている私がいる。

このくだらない日常が私は好きだ。けんかしたときも、いつの間にか元に戻っている。いつもは口にしないけれど、学校で母の話題を口にするとき、口数が多くなる気がする。百年後も、千年後も、来世でも、このやり取りが続けばいいね。



届いてほしい

僕が幼い頃に父と離婚した母は、女手一つで一生懸命、僕と兄を育ててくれた。

四年前、そんな母は他界した。本当に急な出来事だった。しばらくは、母方の祖父母にお世話になった。それから、幼い頃離婚した父と暮らすことになり、既に再婚していた父の相手、つまり今の母と暮らすことになった。

母は僕たちを誰よりも愛してくれた。家事ということを一度もしたことがなかった僕に、一つ一つ丁寧に教えてくれた。

もし、自分だったら、自分で産んでもいない子供をこんなにも大切に育ててあげられるだろうか。できないだろう。疲れて帰ってきて、精一杯の声を出して怒ることや、家族のために家事をすることも。だから、こんな形でしか伝えられないけれど、届いてほしい。

本当にありがとう。

「想いをつなげる」言の葉

— 親から子へ —



笑顔

私のスマホの待受画面は、君の三才の頃のあどけない笑顔の写メです。

君と大きな口喧嘩をする度に、私はその画面を見ながら、

「昔は、このかわいい口は、クソババなんて言わなかったよね。」

と、わざと大きな独り言を言う。それを、

「いつまでも、かわいいままじゃいられないんだよ！」

と、悪態をつきながらも、君が笑いだして、いつしかバトルは終了。

小さい頃の笑顔はもちろんだけれど、

十五才に成長したお兄さんになった君の時々見せる笑顔も、お母さんは大好きだよ。

(面と向かっては、言えないけれどね。)



君と私

話をしない君 話を聞きたい私

いじけている君 へこんでいる私

意地をはる君 ゆずらない私

かみあうようで かみあわない

うまくいかないようで うまくいくようで

目標に迷う君 自分で見つけてほしい私

試行錯誤の君 試行錯誤の私

子供十五年の君 親十五年の私

これからも山あり谷ありだけど

これからも親子でいこうか



手を振るあなた

あなたが小学生のとき、朝の登校で家を出て坂道を登りきったところで、必ず家の方に振り返って手を振ってくれるのが日課でしたね。私もあなたの姿が見えなくなるまで見送るのが日課でした。

ある朝、私が忙しくしていて玄関で「行ってらっしゃい。」の声かけしかできず、パタンと閉まったドア。しばらくしてなんとなく気になって小窓から外を覗いてみると、あなたは閉まったドアに向かっていつものように手を振っていました。

そのとき、私は胸が締めつけられる感じになり、忙しさを理由に心の余裕がなかったことを後悔しました。

あのときは本当にごめんね。そしてあのとき、手を振ってくれていたあなたを一層愛しく思いました。

大当たり

毎日はとても忙しいけれど、
その分とても充実していて、
疲れて不機嫌になったり、
冗談を言って笑ったり、
君と過ごす
そんな毎日が宝物です。
君の父親になれたことが、
人生の大当たり。
だから、
宝くじまでは欲張らないことにするよ。



「反抗き念日」

ダンと机をたたき、ドアをバシンと閉めた。

一瞬にして家族の時間が止まった。

これが反抗期？

この時期を、もっとドーンと構えて迎えるはずがなぜか、うろたえてしまった。

あなたがまた一步成長した記念日なのに、なぜか私から一步離れた気がして、寂しくなった。

私の母もこんな気持ちだったのかな？

私は親としてまだまだですね。

今日は反抗き念日。私もあなたと共に成長していけるように頑張ります。

磨かれた靴

朝起きて、磨かれた靴に目が覚めた。

父の日でも、何の記念日でもない日に、娘が磨いてくれたと知った。

以前のように語り合うことは少ないけれど、

家族の絆を感じた瞬間だった。

ありがとう。

優しい気持ちをありがとう。



お味噌汁の話

夏休みに感じたことなのですが、子供たちがいつもおいしいと言って食べてくれる私のお味噌汁の話です。

朝作ってお昼も食べられるように、たくさん準備して出かけるのですが、その日は作らずに仕事に出かけました。

夕方帰ると、お味噌汁のにおいがします。お姉ちゃんが作ってくれました。とてもうれしくてみんなで食べました。私とおんなじ味でした。

上手に作ってくれたうれしさと、私が作らなくてもおんなじ味に作れるのかあ、と、寂しい気持ちになりました。

成長はともうれしいんですけれどね。



一本取られました

いつも笑顔の娘に、

「反抗期はまだなの？」と、尋ねると、

「お母さんが更年期だから良い子にしています。」と、答える娘。

一本取られました。



親から「君」へのメッセージ

きみがこれからの人生に不安を感じたときは、

ためしに僕たちに聞いてほしい。

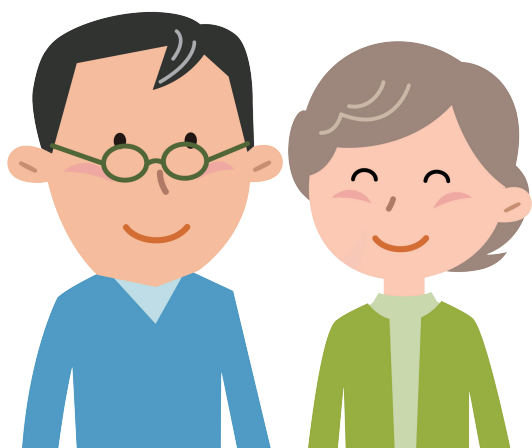
のん気で頼りない親だけれど、

あなたが最愛の人に巡り会うまで、あなたと悩み続ける努力を惜しまない。

おそれ多いけれど、世界の誰もがあなたの敵になつたとしても、

いっしょに考える存在であり続ける自信があります。

だから、自分を高める努力を惜しまず人生を楽しめ！



お弁当づくりの宿題

夏休みに出た「お弁当づくり」の宿題。

母子で作り、お父さんの職場に届けることに決めました。初めての卵焼き、俵おすび、肉巻き、どれもきれいに仕上がるように、丁寧に、丁寧に、作っていたね。

「めんどくせえ。」「大変じゃん。」

そんな声が聞こえてくるのかと置いていたけれど、この宿題は違っていたね。時間はかかっても、丁寧に、丁寧に……。

出来上がった弁当を袋に入れるときに、あなたがさっと入れたお父さんへの一行の手紙。

『いつもありがとう。』

私まで嬉しくなりました。心の温かい子に育ってくれて、ありがとう。



ビデオを観ながら……

今年の夏であなたは十五歳になりました。そして今年は高校受験。

毎日、「試験、大丈夫？」、「成績が落ちたらどうするの？」と、心配ばかりをしている私。なんとなく不愉快そうなあなた。

先日の暇な夕食時、子供達の産まれた頃のビデオを久しぶりに観ました。

首が座ったと言っては喜び、寝返りをしたと言っては夫婦ではしゃぎ……。一人で歩いて公園に連れて行ったとき。転びそうになっても、「がんばれ、がんばれ。」と、応援して、転んでしまっても、「よくがんばったね。」と、抱いて泣きやむまで背中をさすってあげていた。

ビデオを観ながら泣いてしまいました。

どうして今、まだ転んでもいないあなたに注意ばかりして、怒ってばかりいるんだろう。

毎日がんばっているあなたを見守っていいこう。

「がんばれ、がんばれ。」

「想いを交える」言の葉

—子から親へ—



待っているよ

今までたくさん迷惑をかけてきたね。

中学一年生の頃は、何回も学校に呼び出されたね。いつも学校に行くお母さんの背中を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいだったよ。

だから、中学二年生の頃は、一年の頃に比べて落ち着いた学校生活を送ったよ。

中学三年生になって、いろいろなことに挑戦したよ。学級総務になったし、応援団長にもなったよ。

これから、お母さんが学校に行くときは僕もお母さんも笑顔でいられるようにするよ。学校行事にたくさんきてね。待っているよ。

弁当箱入れの中に……

何かの大会や遠足の日になると、いつも入っている小さな手紙。

その内容はいつも違っていて、元氣になれます。

「がんばって。あなたならできる。」

「楽しんでね。いい思い出ができるといいね。」

朝も同じようなことを言っていたけれど、手紙だとやっぱりうれしい。

いつもは言えないありがとう。

今なら少し言える気がする。

お母さんありがとう。

お父さんありがとう。

交換ノート～家族っていいな～

父の顔も母の顔も見ることすらできず、亡くなってしまった妹の命を前に、私が産まれてこなければ、妹は産まれて来られたのではないか、そう思った。毎晩そう思うたび、涙が流れた。

そんなある日、私の机上に一冊のノートが置かれていた。「交換ノート」と書かれていた。

そこには、「ママはあなたが生まれてきてくれて本当に嬉しいよ。生まれてこなければよかったなんて思わないで。お空にいる、あなたの妹も泣いちゃうよ。それでも消えたいとか思うんだったら、この交換ノートに相談書いてね。大好きだよ。」と、温かい字で書かれていた。

私は、「妹の分まで生きよう。」そう強く思った。交換ノートは、今は机の奥にしまっている。

「私を産んでくれてありがとう。」その言葉を最後にして。

朝食

朝、起きてきついなか、四人分の食料を料理へと変えてくれるお母さん。僕はそんなの普通だと思っていた。しかし、朝にサプライズ気分で作ったら、とても大変だった。

そのときは「ありがとう。」と、お母さんに言われてしまった。

本当に言うべきは僕なのに。なんで毎日言えないんだらう。不思議と頭を横切った。お母さん、朝食作ってくれてありがとう。これからもよろしく。



お母さんの手

ある日、事故は起こった。お母さんの悲鳴。車に乗っていたとき、いきなりブレーキがかからなくなって、前を見ると車が何回転もし、エアバッグが作動し、いつのまにかガードレールにぶつかっていた。

突然の出来事だった。僕は、助手席に乗っていてお母さんと二人だった。

足元を見てみると、ひざの上にお母さんの手があった。お母さんは、自分の体を犠牲にしてまで、僕を守ってくれた。そのとき僕は、胸が熱くなった。とてもぬくもりのある手だった。

あのときのことは一瞬で、あまり覚えてはいないけれど、お母さんが手を伸ばしてくれたことは、はっきりと覚えている。

お母さんは、そのとき、涙目だった。

それだけぼくのことを思ってくれたことがよくわかった。

ぼくもお母さんのために精一杯恩返しをしたい。

分厚い壁

「なんでもできない。」

「ごめんなさい。今からするよ。」

「ぐちぐちうるさい。」

「ごめんなさい。静かにするよ。」

「うぜらしか。」

「ごめんなさい……。」

小さい頃はこんな関係じゃなかったのにな。

どうしてかな。

もっと、別の話をしたいな。

私と父の間にできた、分厚い壁、

今こそ壊すべきじゃないか。



一緒に歩いてくれてありがとう

私は小学一年生の頃、「学校に行きたくない。」と、忙しい朝にぐずって、結局、毎日学校までお母さんに付いてきてもらっていた。学校に行きたくない理由、それは、私が人見知りのせいで友達がいなかったからだ。

一人で学校に行けないのは、二年生のはじめまで続いた。でも、お母さんは毎日一緒に行ってくれた。私は二年生になり、自分に自信がついたのか、恥ずかしくなったのかは分からないけれど、「今日は、一人で行けるから。」そう言って学校まで一人で歩いた。

今思うと、お母さんは、学校までの坂を下って、帰りはその坂を上って、毎日こんなことをするのはきつかったと思う。でも、あのとき一緒に歩いてくれてありがとう。お母さんのおかげで今は、たくさんの友達がいるよ。

口には出して言えないけれど、ありがとう。

お母さん

お母さんは、私がテストで悪い点を持って帰って来ても怒らない。かわりに、「できなかったんじゃないかって、やらなかったんだよ。」って言う。

お母さんは、私にできないことがあると、「頑張れ。」とは絶対に言わない。でも、「失敗したとしても、全力でやるのとやらないのは違うよ。」と、言う。

お母さんがいるから、立ち直れたり頑張れたりする。

私も、いつかお母さんのようなお母さんになりたい。



私の母

私の母は、強い。ケンカは絶対に勝てない。

私は以前、友達に傷付けるようなことをしてしまった。すると、一番怒った人は、私の母だった。母は、私のほっぺたを叩いた。私は、

「関わらないで！」

と、言っただけで母に飛びかかった。しかし、強い母には勝てず、私は泣いた。その姿を見て母が言った。

「あんたに負けたら、私は母親失格だよ！」

私は、母の言っている意味が分からなかった。それからよく考えた。そして、母にあやまった。母は、私をぎゅっと抱きしめてくれた。私はとても安心して泣いた。

世界一強くて、世界一優しい母。完璧な母。私も母のような人になりたい。

必殺技

お母さんの必殺技

「もう好きなようにしなさい。」

僕はいつもこれでやられる。



どんなときもどんなときでも

母はどんなときも一生懸命です。

どんなときも我慢強いです。

どんなときも意地をはっています。

どんなときも叱ってきます。

でも、そんな母は、

どんなときもごはんを作ってくれます。

どんなときも洗濯をしてくれます。

どんなときも仕事を頑張っています。

どんなときも僕を愛してくれます。

どんなときでも母は僕のためにしてくれ

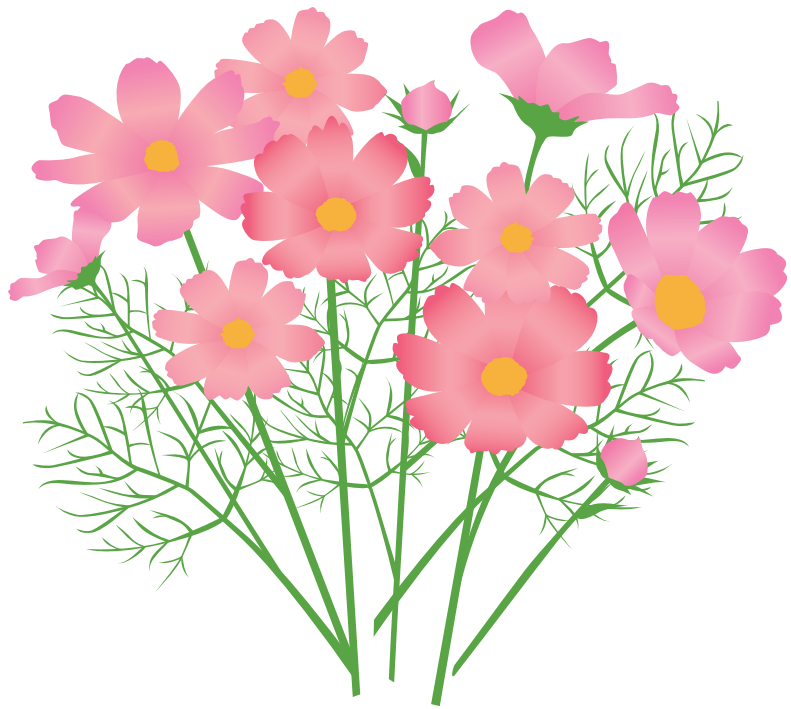
ています。

どんなときでも僕はいます。

どんなときでも母の疲労を僕は少しなら

いやせます。

どんなときでも僕を頼ってね。



「想いを重ねる」言の葉

— 親から子へ —



登ってこい

目の高さもずいぶん近付いた。

靴のサイズはどうとう追い抜かれた。

声も変わりずいぶん大人になってきた。

口ごたえも一丁前になってきた。

だけど、まだまだ家族で一番のイスを明け

渡す気はない。

もっともっと高く登ってこい。

いつか一緒に飲みたいな。



娘の思春期

ある日、

「何でそんなに『はい』って言えないの？」

言い訳が先で、口答えばかりするの？」

と、私が叫ぶ。

すると娘が、

「お兄ちゃんは、しゃべらない思春期！」

私は、口答えをする思春期！」

と、叫ぶ。

性格とっていましたが、ただ今、思春期中なんですね。そうでしたか……。

あなたの言葉のおかげで、私の怒りにもブレーキをかける用意が出来ました。

では、あなたの思春期を見守っていきましようか。

ありがとう

息子は離乳食開始時期から食物アレルギーを発症し、卵・乳製品・小麦製品を食べることができない。遠足でのおやつ交換や誕生日のケーキ、旅行先での食事……。今までたくさん我慢させてきた。

「お母さんのお腹にいるときに、お母さんが食べた食事のせいで、僕はこんな病気になるんだよ。」

と、一度だけ言われ、こっそり涙をぬぐったことを今でも覚えている。

そんな息子も中学生になり、

「食べられないのも僕の生きている証。この病気があるから僕なんだ。だから僕は、お母さんの子供に生まれることができて良かった。」

と、言ってくれるようになった。

「こちらこそ、生まれてきてくれてありがとう。大きくなったね……。」

先に眠った息子の頭をそつとなでてみた。

春のようなあなたへ

あなたは態度、言葉遣い、とても丁寧。反抗する気配はさらさらなくて、とにかくいつもにこにこしていて。

吹奏楽部では部長として、家では長女として、父親である僕に対しては、ときとして母親みたいに。

あなたはいつも春の陽ざしのような、優しい空気をまとい、惜しみなく降り注ぎ、もたらしてくれる。もし僕が中学生に戻れるとしたら、きつとあなたのような友だちがほしいと願うだろう。

―でも。

我慢しているような気がする。いろいろ。

泣きたいときは、泣けばいい。

頑張らなくなったらって大丈夫。君は頑張っている。

僕にはそれが分かる。何故ならいつも、君を見ているから。これからもずっとずっと。

反抗期万歳

最近、少しだけ嬉しいことがあります。
小さい頃から、私を氣遣ってくれて、あまりわがママを言わないあなたでしたが、「辛い時はどうしているの？」と、聞いてみたことがありました。「ふとんに頭を突っ込んで、わーって、大きな声を出す。」
と、という言葉聞いたときに、あなたの大きな優しさと、氣を遣わせてごめんという思いから、胸が熱くなりました。
最近、時々だけど、イライラをぶつけてくれるようになりましたね。
反抗期万歳！
やっと親子喧嘩ができるようになりました。

ふと気が付くと……

ふと気が付くと、
背丈が私と並んでいる。
ふと気が付くと、
重い荷物も一緒に持ってくれている。
ふと気が付くと、
うたた寝した私に掛けられた、
温かい ひざかけ。
ささいなことの積みかさねが、
私の明日への活力となる。
いつもありがとう。



チャイルドシート

もう十年以上前の話。

一歳と二歳の息子を、後部座席のチャイルドシートに乗せて運転中、弟が大泣きし始めた。

「どうしたの？大丈夫よ。」

私が声を掛けても泣きやまず、しばらくこのやりとりが続いた。

弟がピタっと泣きやんだ。

どうしたんだろうと信号待ちで振り返ると、兄が弟の手を握りしめて、ほほ笑んでいた。

言葉を話せない二人は、ちゃんと心を通わせていた。

今は兄弟ゲンカばかりだけど、心はちゃんと通っているよね？

息子へ

息子へーおまえにまだ、言っていなかったかな。

父さん達、結婚してしばらく、子供に恵まれなかった。

ある日、母さんが「赤ちゃん、できた！」と、言って笑ったとき、もう最高に幸せだったよ！

そして、おまえが産まれた。

父さんが父になり、母さんは、母になった。

全て、おまえのおかげだ。ありがとうな。産まれて来てくれて、ありがとう。

せっかくの人生だ。

父さんよりも、楽しめ！
④

家路

単身赴任も早五年。

月に一度の家族の笑顔。

「今、どこ？」と、尋ねてくる、

中学生になっても変わらぬ娘の電話に

早く顔が見たくて、

父は家路を急ぐ。



あなたへ

認知症のおじいちゃんとその世話をする
おばあちゃんに、

「けんかするほど仲がいいんだよ。」

と、声を掛けてくれたあなた。

今までの苦労も吹き飛ばすほど、嬉しい言
葉と話すおばあちゃん。

ときには名前も忘れてしまふけれど、ず
っと変わらぬ優しいおじいちゃん。

よく病院にも一緒に行ってくれるあなた、
ありがとう。

「おばあちゃんも無理しないでね。」

そんな優しい言葉を掛けてくれるあなた
は、おじいちゃんの孫であり、私の大事な息
子です。

夢

「サッカー選手になりたい。」

これが、あなたの小学校六年生までの夢。

その純粋な素直な想いを打ち砕いた母。

そんなにあまい世界ではないことを淡々と語り続けた私。

と語り続けた私。

いつの間にか、『夢』を語るものがなく

なりましたね。

うそでも応援すればよかったと……。

でも、あなたは、とびっきりの笑顔である日、言いました。

「僕の夢は、体育教師になってサッカーの顧問をすることだ。」と。

母は、心の中で泣きました。もちろん嬉しかったからです。

母は、心の中で泣きました。もちろん嬉しかったからです。

泣かすなよお

小さな君に会いたくなつて、

懐かしいビデオを引っ張り出す。

「かわいいなあ。もっといっぱいかわいいが

ればよかった。」

言った私の隣で、

「充分かわいがってもらってきたよ。」

だって。

泣かすなよお。



平成 28 年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 16,943 点 (中学生 15,035 点 親 1,908 点)

中学生の部			親の部		
賞	学 校 名	氏 名	賞	学 校 名	氏 名
大 賞	鹿大附属中	能 見 菜 子	大 賞	明 和 中	伊 藤 斉 子
準大賞	桜 丘 中	宅 間 未 来	準大賞	吉 田 南 中	東 まゆみ
準大賞	甲 東 中	福 重 大 樹	準大賞	城 西 中	新 西 順 子
優秀賞	志 學 館	田 中 くるみ	優秀賞	鹿大附属中	又 木 寿 文
優秀賞	明 和 中	柿 園 愛 菜	優秀賞	甲 南 中	林 一 穂
優秀賞	吉 田 南 中	狩 野 愛	優秀賞	吉 野 東 中	池 田 恵 子
優秀賞	皇 徳 寺 中	肥 後 杏 奈	優秀賞	鹿大附属中	日 渡 富 雄
優秀賞	坂 元 中	枝 元 颯 詩	優秀賞	福 平 中	押 葉 子
優秀賞	西 陵 中	酒 匂 結 月	優秀賞	郡 山 中	古 里 真 紀
優秀賞	武 岡 中	白 井 誠 司	優秀賞	郡 山 中	北 野 研
優秀賞	武 岡 中	山 下 すずか	優秀賞	武 岡 中	東 由紀子
入 選	吉 田 南 中	有 村 真 奈	入 選	明 和 中	上木原 香 織
入 選	錫 山 中	藤 原 誉 盛	入 選	鹿大附属中	下之藪 真由美
入 選	甲 南 中	下 神 明日香	入 選	鹿大附属中	相 場 直 美
入 選	星 峯 中	富 岡 萌	入 選	鹿大附属中	笠 師 行 成
入 選	坂 元 中	福 山 美 桜	入 選	星 峯 中	日 高 圭一郎
入 選	緑 丘 中	森 智英理	入 選	星 峯 中	楠 元 恵 美
入 選	和 田 中	上福元 悌 司	入 選	星 峯 中	長 野 千 晶
入 選	長 田 中	和 田 依 織	入 選	吉 野 中	有 木 梨 絵
入 選	長 田 中	田 中 響 稀	入 選	福 平 中	前 田 一 郎
入 選	清 水 中	有 村 心 吾	入 選	郡 山 中	木 原 恵 子
入 選	清 水 中	齊 藤 功 志	入 選	清 水 中	牧 野 美保子
			入 選	清 水 中	三 重 益
団体特別賞			吉田南中学校		

平成 28 年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成 28 年 10 月 15 日（土） 市民文化ホール 第 2 ホール～



杉元教育長より
表彰状の授与



受賞者インタビュー



鹿児島女子高校放送部
生徒による作品朗読



審査委員長講評

審査員講評

審査委員長 上谷 順三郎 先生

「こころの言の葉」コンクールも十四回目となりました。作品集も作られ、ホームページでの閲覧も可能となりました。今回の作品を読みながら感じたことは、本コンクールが、中学生と保護者の皆さんにとって、お互いの表現を交流する場として定着してきたということです。これまでの作品集を読んで感じたことが書かれていたり、お互いの作品を読み合った感想が書かれていたりということだけでなく、書かれる内容にいわゆる硬さや構えがなくなり、より素直な気持ちが続られるようになったと思います。つまり、中学生と保護者が互いの思いを伝え合う場として本コンクールが役立っていると実感できたのです。

思いを伝える場があれば思いは表現できません。表現された思いを読まなければお互いの思いを知ることができません。ここに来れば、中学生と保護者がお互いの思いを表現でき、読んで感じ合うことができます。そういう場所として本コンクールが今後も続けることを願っています。

本作品集からは、母と娘、母と息子、父と娘、父と息子の関係をはじめ、様々な形の家族一人一人の声が聞こえてきます。この作品集を読みながら、どうぞ自分自身の家族のことを思い描いてみてください。そして今度は自分の思いを「こころの言の葉」として表現してください。自分の思いを表現することによって、きっとこれまでよりも多くの声が聞こえてくるようになると思います。

鹿児島大学教授

大浦 慶子 先生

今年も「こころの言の葉」の審査をさせていただき、心温まる素敵な葉に数多く出会いました。また、今年は今ままで以上に、保護者の応募が増えています。それも、父親からの作品が多く寄せられました。父親としての威厳や愛情が伝わる作品でした。

寄せられた作品には、それぞれの家庭の日々の営みが、感じられました。
・母の死後、祖父母宅にいた後、再婚していた父親に引き取られ、そこで出会った義母への感謝の心。

・母の死後、祖母に育てられ、二人に対して産みの母親と育ての母親として尊敬の念を抱く心。
・母の再婚で義父となった父親への感謝の心。
・家を飛び出した自分を必死になって捜した母の涙に心を打たれ、きちんとやりなおそうと決意する心。

等々、日頃は親に反抗していても、言葉にして振り返ってみると、成長している我が子に気付き、愛おしくも頼もしく思う親の姿や、一方、小言ばかり言われているようでも真に自分を思っている親の愛情に、改めて気付く子供の姿がありました。

日頃、言葉にしたくてもできない言の葉を伝えることのできる「こころの言の葉」作品集の素晴らしさを改めて感じることでした。多感なこの時期だからこそ、心を開き言葉にして、自分の思いを伝え、これからの自分の生き方を見つめてほしいと思うことでした。

ぜひ、多くの生徒・保護者、そして、地域の方々にも読んでほしいと思います。

市教育委員会スクールカウンセラー

遠藤 陽子 先生

今年もこの季節がやってきました。「こころの言の葉」は、普段気にも留めない親子の繋がりを改めて感じさせてくれます。

子供たちの文章には、成長を感じさせる頼もしい表情が感じられる一方、まだまだ幼さの残るあどけない姿に、数十年前の自分を重ね、懐かしささえ感じました。IT化が進み、私たちを取り巻く環境が変わっても、思春期を迎える子供たちの心の中には、今も昔も変わることなく大人になるための迷いと葛藤、そして親を敬う気持ちで溢れていました。そして、小さな変化も見逃すまいと全身全霊で子供に向き合う保護者の手紙には、同じ親としてハッと気付かされることも多く、子を想う多様な愛の形を感じました。だからこそ、審査には大変苦労しましたが、たとえ賞を取らずとも、親と子が向き合い、日頃忘れがちな家族の絆を感じていただけことは、それ以上の価値があったのではないかと感じます。

ぜひ、この作品集を最後まで御覧ください。ひとつと本を閉じたとき、御自身の生活と作品の思いが重なり、親は子に、「ありがとう。」と、伝えたくなっていることでしょう。

「こころの言の葉」はたくさん愛と親子の結び付きを感じさせてくれます。親子の関係性が多様化する現代においても、普遍的な繋がりと、何が大切かを気付かせてくれるこの作品集を、ぜひ多くの方に手にとっていただき、読み継がれていくことを願っています。

フリーアナウンサー

隈元 浩二郎 先生

牧 眞弘 先生

「絆」という漢字は「いとへん」に半分と書きますが、今回、親子それぞれの立場から送られた「こころの言の葉」のメッセージは、書かれた御本人はもちろんのこと、それぞれの愛する親や子を意識した目には見えないそれぞれの言霊の糸が放たれ、結び合っているように感じました。親子の互いに配慮する相手意識こそが、人が求める究極の相手意識なのだと、改めて再認識する次第でした。

人は筋書きのない人生の中で、多くの人々と関わりをもちながら生きています。どんなに頑張っても、一人で生きていける人はいません。そんな世の中で、親子こそが人生の基盤なる人間関係であると同時に、人生を乗り越えていく上での、人の相互の関わりのレストランドなのだと思えました。そう思っ、また審査した原稿を読み直してみました。思わず心を鷲づかみにされたり、心涙する表現に圧倒されたりするなど、『自分もこうありたい。』とか、『かつてはそうだったな。』などと、感心することしきりでした。

どうぞ皆さんも、この珠玉の作品集を読み味わってください。多感な中学生の心に宿る本当の姿、目指すべき親子像が、見え隠れします。そして、それに呼応したように、親としてあるべき姿が、そこには威風堂々と立っています。ぜひ、読み味わっていただき、今の御自分の立ち位置を認識されると共に、これから目指す親子像の参考にしていただければ幸いです。

元中学校校長

あなたにももらったたくさんの笑顔
親子で流したたくさんの涙
ことばにして伝えたい「ありがとう。」
ことばにして伝えたい「ごめんね。」

感動や成長は、息子や娘と共に
ふだん素直に伝えられない親子の思いをこのメッセージに込めて……

はじめに、第十四回「こころの言の葉」コンクール審査にあたり、御応募いただいた全ての方に感謝を申し上げます。一点一点作品を読ませていただく中で、背景などが目に浮かび、二回三回と読むうちに心を打たれ、思わず涙があふれ出た作品もございました。

審査員という立場上、優劣付けざるを得ませんでしたが、想いや気持ちの部分においては、優劣は付けられません。標題のとおり、親から子へ、そして子から親へ、普段は言葉に表すことができない思いが詰まった作品ばかりでした。

私も経験しましたが、多感期の中学生の世代では、素直になれない子供たち。親として、本来なら頑張ってくれているだけで「ありがとう。」なのに、愛情あふれるあまり、ついつい余計なことまで、必要以上に言葉をぶつけてしまいがちです。この「こころの言の葉」を通じて、普段は伝えることのできない感謝の気持ちを手紙に、葉書に、言葉として表すことで、綴ることで、お互いの存在の大切さや愛情を再認識いただけたら幸いです。

今しかできない子育てを、全力で楽しみましょう。

市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十四集が完成しました。過去最高の応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。特に親の部の応募が五年連続で千点を超えたことは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」にとつて、大きな意義があると思います。

今回、学校から届けられた生徒の応募作品を確認していたところ、大きめの付箋紙が付いた作品を見付けました。生徒の書いた文章に対して、学校の先生が次のような付箋紙を付けていたのです。

「短い作品ですが、これまで彼が過ごしてきた日々を知っている私たちは、この文章を読んで涙が止まりませんでした。『こころの言の葉』は、両親、家族だけでなく、私たち教職員にも、心に響くものになっています。……まだ涙が止まりません。」

それぞれの作品はもちろんですが、先生方の付箋紙にも温かい思いが込められているこのコンクールは、本当に多くの市民の皆様に支持されているのだと、編集冥利に尽きる思いでした。掲載されている作品一編一編に込められた親子の思いを、じっくりと味わっていただければ幸いです。

本年度の団体特別賞は、吉田南中学校が受賞しました。PTAと連携すること、優れた作品が数多く出品されていることなどの理由から今回の授賞となりました。この取組は、親子の心の交流を図るために、本事業が活用された好例と言えるでしょう。

来年度も、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでいきたいと思っております。更に多くの素晴らしい言の葉が寄せられることを心からお待ちしています。

こころの言の葉

～第14集 今、あなたに届けたい～

平成29年1月31日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099)227-1941 FAX (099)227-1923